

大丈夫か、日本の歴史教育 世界の中の日本を考える

ジャーナリスト

三木寛郎

「世界史」と「日本史」の乖離

日本の学校教育におけるカリキュラムにおいて、なぜか歴史教育は「世界史」と「日本史」に分けられている。さらに日本史においては徳川幕府が大政奉還を行った1867年までに重点が置かれている傾向にある。そもそも歴史教育の流れを追うべく第二次大戦以前からのカリキュラムを見れば、そこには「日本史」「東洋史」「西洋史」という概念が存在している。元を正せば明治初年に成立した近代学校制度において、小学校を含めて外国史が盛んに学習されていたという。これを象徴するのが、1872年(明治4年)に当時の文部省が作成した小学校用の歴史教科書は「皇国」「支那」「西洋上・下」の4冊で構成されている。しかし1881年(明治14年)にな

ると、小学校における歴史教育を日本史・国史の2教科に限定される。義務教育において世界史教育は排除されたことになる。それでも自国史教育の中での「外国史教材」として世界史は残されたが日本は大きく軍国主義に傾いていく。

こうした中、戦前のいわゆる尋常小学校での歴史教育は高学年における「国史」教科書での授業が基本となり、世界史は必要な部分を外国史として自国史の中で扱われる方法が残された。また戦時中には「国史」を「大東亜」に拡大する教科書が採用されている。

戦後(1947年)になり、中学校では社会科教育は3年間に渡る社会科教育の一環として2・3年での「日本史」(国史)でスタートしている。「日本史」の中において一部世界史に関わる内容が取り上げられ

てはいるが、戦後の中学校における歴史教育では歴史とは「日本史」のことであり、「世界史」の概念は存在しなかったことになる。ところが1948年10月に突如、歴史教育は翌年度から「世界史」と「日本史」(国史)と改められることが発表され、1949年4月から「世界史」の授業が開始されたのである。ここが起点となつて今に続く歴史教育が始まるのだが、残念ながら内容的には「日本史」と「世界史」は少なくとも中等教育では関連づけられることなく別の教科として存在していたのである。

近代史が軽んじられる傾向

一方、高等学校における歴史教育に目を移せば、現在の高等学校では「地理歴史」のなかに「世界史」、「日本史」、「地理」の3科目が存



在しこれを組み合わせて履修する。1994年から「世界史」は必修となり「日本史」は地理との選択が可能となっている。ここでも歴史教育は「世界史」と「日本史」に分割されている。たしかに「日本史」は小・中学校でも学ぶが「世界史」には踏み込まない。そこで高等学校では社会のグローバル化に合わせて「世界史」に重点を置くことになったようだ。つまり、高等学校では逆に「日本史」には一切触れずにいることになる。結局のところ「日本史」と「世

「歴史」は切り離されたままであり、しかも小中学校で履修する「日本史」においては、その内容もほとんどが明治維新以前の内容である。中学校の学習指導要領によれば、「歴史的事象に対する関心を高め、我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解させ、それを通して我が国の伝統と文化の特色を広い視野に立って考えさせるとともに、我が国の歴史に対する愛情を深め、国民としての自覚を育てる」となっており、そのあとに①古代までの日本、②中世の日本、③近世の日本、④近代の日本と世界、⑤現代の日本と世界、と続き、順を追って進めていけば、やはり江戸幕府あたりで息切れしてあとはおざなりになる傾向は否めない。小学校6年間で「大化の改新」「鎌倉幕府の始まり」「明治維新」など、「わが国の歴史上の主な事象」について人物の働きや文化財を通じて学ぶ』となっており、取り上げる人物として卑弥呼や藤原道長、徳川家康ら42人を挙げている。さらに2008年の改定で縄文時代の学習が復活し、やはり明治維新以降の近代史に

到達するにはなかなか困難な状況であると言える。

「日本史」と「世界史」が対比できない

例えば、徳川家康が江戸城に入城したのが1590年(天正18年)、1603年に征夷大將軍になり江戸幕府が開かれ江戸時代がスタートする。そのころオランダでは世界初の株式会社とされる東インド会社が生まれ、以降アジア地域への進出が盛んになる。一方東インド会社はイギリスやフランスにも生まれ、それぞれが先を争ってアジアに殺到した。それと同時にキリスト教がアジアにもたらされ、同時にアジアの国々は次々とスペインやポルトガルといったヨーロッパ諸国の植民地となっていた。それを知った徳川幕府はキリスト教を禁じたが、同じキリスト

教でもカトリックと違い植民地化を前提としないプロテスタントのオランダにのみ貿易を許した。これが鎖国というわけである。

鎖国することで泰平の世が訪れ、

およそ265年の間、江戸には歌舞伎、浮世絵、落語など今につながるさまざまな文化が開花した。一方世界では新大陸に移住した人々が1775年に独立戦争を起こし1776年7月4日にアメリカ合衆国が誕生する。ちなみにペリー提督が捕鯨のための水補給を求めて日本に開国を迫ったのは1853年のことである。鎖国から開国につながるこのストーリーには、日本の歴史のみならずヨーロッパの歴史、アジアの歴史、アメリカの歴史も含まれている。ついになら、アメリカで奴隷解放に端を発した南北戦争が起こったのは1861年〜1865年のこと。1861年といえば日本では万延元年であり、勝海舟、福沢諭吉、ジョン万次郎などが、咸臨丸でアメリカへ出航した年である。

こうなると、いまの日本における歴史教育はお手上げとなる。「日本史」を中心とし、背景に「世界史」

が存在するような今のやり方では、相互の出来事がリンクできない。いわば、縦割りの歴史教育なのだ。

「世界史」の中の「日本史」であれ

戦前から連綿と続く日本の歴史教育は「日本史」が前提となり、その背景に「世界史」が置かれる状況から未だに脱却できないように思われる。日本は世界の一部であり、世界史の流れの中で日本がどのように位置づけられるのが大切なのではないだろうか。

日本の歴史教育が再構築されることによって、教育の現場で世界につながる視点が子供たちの中に醸成されるようになれば、近い将来、日本の世界における立ち位置や対応、ひいては外交におけるテクニクなども大きく進化できるのではないだろうか。

学校教育の現場において、これまでの人類の歩みが「世界史」でもなく、「日本史」でもなく、単に「歴史」として捉えられるようになれば、世界はもう少し小さくなるかもしれない。

